

研究ノート

ノルベルト・ボルツの「メディア論」と
社会システム論伊藤高史[†]

要約：本稿は、ドイツの哲学者ノルベルト・ボルツの「メディア論」の特徴を明らかにするものである。ボルツはニクラス・ルーマンの社会システム論から強く影響を受け、社会を個人間の「理性的な合意」に基礎づけようとするユルゲン・ハーバーマスの思想を徹底的に批判する。その一方で、メディアと社会との関係についての考察を展開する。我々が現実を観察するインタフェースとしてのメディアはデジタル化の時代を迎えて根本的に変化し、現実とメディア表象の二分法を根本的に解体し、人間の「感覚変容」をもたらし、「弱いつながり」が重視される時代を導いた。これらの考察は、メディア文化と身体性などの関係を社会的に考える上で大きな示唆を与えてくれるものだ。

キーワード：メディア論, メディア社会学, 社会システム

目次

1. 本稿の目的と問題意識
2. ボルツの社会観と社会システム論
 - 2-1. ブラックボックスとしての個人と制御メディア
 - 2-2. コミュニケーションの反復と連鎖による社会システムの生成
 - 2-3. インタフェースとしてのメディア
3. ボルツによるハーバーマス批判
 - 3-1. ハーバーマスの反事実的規範
 - 3-2. 生活世界というユートピア
4. ボルツによるメディア論
 - 4-1. 近代的個人と活版印刷
 - 4-2. 現実とメディア表象の二分法の解体
 - 4-3. 科学技術とポスト人間主義
 - 4-4. デジタル化時代の人間関係
5. 結語

[†]同志社大学社会学部教授

*2020年12月17日受付, 2020年12月18日掲載決定

1. 本稿の目的と問題意識

本稿では、ドイツの哲学者として活発な著述活動が続けるノルベルト・ボルツの「メディア論」について検討する。このことを通して、ドイツを中心に論じられる「メディア論」が、人間と社会に関する思考様式における根本的な挑戦という側面があることを明らかにし、さらに、ボルツのメディア論からメディア文化を社会学的に考察するための示唆を得ることが本稿の目的である。

ここで「メディア論」というのは単に、「メディア」について論じたもの、という意味ではない。「メディア」の在り方が人間や社会の在り方を決定づけるものであるとする見解のことを指す。こうした「メディア論」を展開した代表的人物は、カナダの英文学者マーシャル・マクルーハンであることは改めて指摘するまでもあるまい。マクルーハンは「メディアはメッセージである」との端的な表現で、メディアを通じて発信され、流通する情報（メッセージ）ではなく、メディアという存在そのものが社会の在り方に決定的な重要性を持つことを指摘したことで知られる（McLuhan=後藤・高儀 1964=1967）。

このような「メディア論」についての議論は今日では、特にドイツの研究者らによって活発に論じられている。日本の複数の研究者による、ドイツの「メディア論者」についての論考を集めた著書も出版されている（寄川 2007）。しかし、日本のメディア社会学において、ドイツのメディア論が十分な注目集めているとは言い難い。このことは、本稿で焦点を当てるボルツに関する我が国での受容状況を見てもわかる。

ボルツについては、日本において既に『批判理論の系譜学』（Bolz=山本・大貫 1989=1997）、『仮象小史』（Bolz=山本 1991=1999）、『カオスとシミュレーション』（Bolz=山本 1992=2000）、『ゲーテンベルク 銀河系の終焉』（Bolz=識名・足立 1993=1999）、『意味に飢える社会』（Bolz=村上 1997=1998）、『世界コミュニケーション』（Bolz=村上 2001=2002）などの著書が翻訳されている。しかし、これほど翻訳がなされているにもかかわらず、ボルツのメディア論の社会的なインパクトについての検討は、筆者が知る限りわが国では十分に為されていない。例えば、ボードリヤールの論考との比較をした水原俊博の論文があるが、ボードリヤールについての考察が中心になっているだけでなく、2015年に刊行された論文であるにもかかわらず、2001年までに刊行されたボルツの著書にしか言及しておらず、ボルツの近年のメディア論の検討が省かれている。また、コンピュータによる仮想現実の構築を中心に検討しており、ボルツのメディア論を正面から検討したとは言い難い（水原 2015）。石光泰夫はディスクリール分析の観点から、上村岳生は社会の意味喪失、あるいはハーバーマス批判との関連で、宮

本真也は批判理論との関連でボルツの思想を検討しているが、いずれもボルツのメディア論については触れられていない（石光 1994, 上村 2003, 宮本 2000）。既に翻訳で知られているにも関わらず、いまだメディア社会学において十分な注目を集めていないボルツの業績の一端を紹介することは、日本のメディア社会学へのささやかな貢献ともなる。

筆者はこれまで、インターネットや SNS を、誰でもが不特定多数の人々に情報発信できる「マス・メディア」であり、今日では誰でもが「マス・コミュニケーション」の過程に情報の発信者として参加し得るとの認識の下、今日のメディア文化を理解するための社会理論について検討してきた。その際には、ドイツの社会学者のニクラス・ルーマンの社会システム論を参照してきた（伊藤 2019; 2020 a; 2020 b）。ボルツは特に、ルーマンの社会システム論から大きな影響を受けてメディア論を展開している。このことから、ボルツのメディア論の検討を通じて、筆者がこれまでに検討してきた社会システム論に基づくメディア文化研究について示唆を得ることができると考えている。

ボルツはメディア論のみならず、ヴァルター・ベンヤミンの美学や、フランクフルト学派（批判理論）の検討など、多岐に渡るテーマについて論じているが、本稿では、ボルツのメディア論を中心に検討する。

本稿ではまず、ボルツがルーマンの社会システム論に依拠してどのような社会像を描いているのかを明らかにした上で、我が国でも広く知られるユルゲン・ハーバーマスに対する彼の手厳しい評価を紹介することで、ボルツの思想の特徴を際立たせる。その上で、ボルツの「メディア論」の特徴を明らかにしたい。ボルツはイマニュエル・カント、フリードリヒ・ニーチェ、マルティン・ハイデガー、ヴァルター・ベンヤミンなどといった、様々な哲学者、思想家に言及しつつ自らの論を展開する。これは、ボルツが哲学者である以上当然であるが、それだけに彼の議論はときに難解になり、その意図するところをつかみにくくなる。本稿では、ボルツの思想の特徴を際立たせるため、他の思想家への言及は最小限にとどめて、筆者なりの解釈を踏まえて言葉を足しつつ、彼のメディア論の中心的論点を浮き彫りにしたい。

2. ボルツの社会観と社会システム論

本節ではまず、ルーマンの社会システム論を取り込んで描かれたボルツの基本的な社会観を明らかにしよう。ここではボルツの思想を明確に示すために、①他者の内面を見通すことができない個人、すなわち、互いにブラックボックスであるような個人同士の集合である社会に秩序を創発させる「制御メディア（後述）」の役割、②制御メディアに導かれたコミュニケーションの反復と連鎖による社会システムの生成、③現実とのイ

インタフェースとしてのメディア——という3つの側面から解説する。

2-1. ブラックボックスとしての個人と制御メディア

社会を形成する個人個人は、互いに相手が何を考え、意図しているのかを見通すことができない。ボルツは、「近代的個人はそれぞれの目的を自由に選択することを通じて特徴づけられる。それゆえ、個人はブラックボックスとしての他者と、すなわち『自由』な他者と対峙する」と言う (Bolz 2012 a: 108)。人間にとって、他人はそれぞれがその内実を見通すことができないブラックボックスである。にもかかわらず、社会には一定の秩序が存在し、ある程度うまく動いているように見える。このことはありそうもないことであるが、現実にはあり得ている。

社会の構成員が相互に他者をブラックボックスとして認識するという考えは、社会を個人個人の理性的な「合意」によって基礎づけようとする見方、わかりやすく言えば、「人々は分かり合える」という前提に立つ見解に対立するものである。素朴な個人主義の立場に立てば、社会の秩序が成立するのは、自由意志を持った個人がコミュニケーションを通じて合意を形成し、その合意に従って人々が行動することに求められよう。そうでなければ、暴力など、上からの権力作用によって社会秩序が保たれるという見解になろう。もっぱら上からの暴力によって社会秩序が保たれるような社会は非民主的な社会である。民主主義的な政治体制をとっている国においても、多かれ少なかれ上からの暴力は社会秩序を保つために不可欠なものであるが、民主主義社会においては、そうした暴力自体も、自由意志をもった個人間の合意によって基礎づけられるのが建前であろう。ボルツの社会観は、こうした常識的とも言える社会観に挑戦するものである。

「社会学がダブル・コンティンジェンシーと名付けたものは、2つのブラックボックスの出会いから生じる。これが社会的なもののはじまりである」とボルツは述べる (ibid.: 108)。社会が、相互にブラックボックスであるような個人と個人の相互行為から成り立つとした場合、いかにしてそこから社会秩序が創発するのか。この問いは社会学において、タルコット・パーソンズの「ダブル・コンティンジェンシー」の議論として知られている。ルーマンの社会システム論も、そうした問題意識を受けついで構成されている (伊藤 2019: 7-10)。そして、ボルツがそのようなルーマンの議論の中で特に重視するのが、ルーマンがパーソンズの議論から発展させた「シンボルによって一般化されたコミュニケーション・メディア」の概念である。

ルーマンの社会システム論に通じたものにはよく了解されているが、ルーマンは「メディア」という概念を、通常の「メディア」とはかなり異なる意味で用いている。このため、ルーマンの「メディア」に関する議論を若干解説しておこう。ルーマンはメディアを①言語、②コミュニケーションを拡充するメディア、③シンボルによって一般化さ

れたコミュニケーション・メディア——の3つに分類する。「メディア」と言えば一般的には、テレビや新聞、あるいはインターネットなど、情報の伝達を媒介するものとイメージされる。ルーマンはそうしたメディアについては、「コミュニケーションを拡充するメディア（拡充メディア）」と呼んでいる。あるいは、「言語」そのものもメディアと捉える。これに対して、「シンボルによって一般化されたコミュニケーション・メディア」は、あるコミュニケーションがどのように受容され、どのような成果を挙げるのか、という問題にかかわるものである（Luhmann=佐藤 1984（2015）=1993：220-222=252-254）。筆者の理解においては、コミュニケーションの相手に対して望むような行為をとらせようとするときに「モノをいうもの」が「シンボルによって一般化されたコミュニケーション・メディア」である。この例としてルーマンは、真理、愛、所有権／貨幣、権力／正義、宗教的信念、芸術などを挙げる（ibid.：222=254）。例えば我々が商店を訪れて商品を購入しようとするとき、相手はその商品を自分に譲り渡すことを確実にする「メディア」は「貨幣」である。我々が行政、警察といったものに訴えて、何かの対策を講じてもらおうとするとき、その訴えは法的に根拠のあるものであるかどうか問われる。会社において部下が上司の指示に従うのは、そこに部下と上司という権力関係が存在するからである。学問においては、「本来であれば」、ある主張をする人の「権威」や「権力」に従うのではなく、「真理であるかどうか」を基準にその重要性が決められる。これらの意味において、「真理」「権力」「貨幣」「法」はメディアとして理解される（伊藤 2018：47）。

ボルツはこの「シンボルによって一般化されたコミュニケーション・メディア」を、「制御メディア Steuerungsmedien」と言い換えているので、本稿でも以下、「制御メディア」と表記しよう（Bolz=識名・足立 1993=1999：79=80）。

個人はそれぞれ個人として自由を有している。にもかかわらず、日々の社会に一定の秩序を保つことを可能にするのは、貨幣や権力といった制御メディアの存在である。人々は制御メディアを媒介することによって、他人が心の中で考えていることを理解できなくとも、コミュニケーションを積み重ねていけるからである。つまり、人々がコミュニケーションを継続させるにあたり、制御メディアは不確実性を軽減させるものであり、コミュニケーションを行う度にブラックボックスである個人同士が「合意」というような過度な負担から人間を解放するものである。

2-2. コミュニケーションの反復と連鎖による社会システムの生成

こうした制御メディアによって人々のコミュニケーションは安定し、コミュニケーションの繰り返しによって社会システムが構成される。このことを考えるにあたり、ボルツはルーマンのコミュニケーション概念に着目する。ルーマンはコミュニケーションを

送り手と受け手という二項対立ではなく、情報、伝達、理解という3つの選択が統一されることによって成立するものと考えた (Luhmann=佐藤 1984=1993:193-201=217-227)。相互にブラックボックスであるはずの個人と個人が理解し合って安定的にコミュニケーションを続けることができるということ、言い換えれば、情報、伝達、理解という3つの選択の統一が安定的に繰り返されることは「ありそうにない」ことだ。しかし、現実の社会を見れば、社会的なコミュニケーションはある程度安定的に営まれていると考えることができる。社会システムとはコミュニケーションの連鎖によって構築されるものであるが、社会システムが成立しているのは、期待されたコミュニケーションが繰り返されて安定することによってである。社会は「終わりなく編み込まれたコミュニケーションの帯」であるとボルツは述べる。「反復とネットワーク化による安定化によって、成立することがありそうにないコミュニケーションは、社会的には日常的なものとなる。コミュニケーションの連鎖がその統一を可能にするのであって、コミュニケーションに参加するものの集団意識がそれを可能にするわけではないのである」(Bolz 2012 a: 53)。ボルツはこのように述べて、社会や秩序を人々の意識に基づく「合意」ではなく、制御メディアに導かれたコミュニケーションの反復によって基礎づけようとするのである。

人がそれぞれ他人にとってのブラックボックスであると認めることは、人の「自由」を認めることでもある (ibid.: 85, 108)。制御メディアは、互いにブラックボックスであるような個人同士がコミュニケーションを行う際に、相手が自分の行為に対してどのように反応するのかを考えるときの負担を軽減するものである。人は、ブラックボックスである他人の意思を確認することなく、自分の意思を相手に対して貫徹させたり、あるいは、自分の意思を相手に押しつけることをあきらめたりすることができる。人々は日々のコミュニケーションを行うにあたり、理性的な合意を繰り返し行っているわけではない。人々は盲目的に、制御メディアに従うことで、日々のコミュニケーションを成立させているのである。重要なのは「合意」でも「合理性」でもなく、コミュニケーションが続いていくという「接続能力」である。「接続能力を通じて、社会秩序が偶然性から生じる」のである (ibid.: 10-11)

2-3. インタフェースとしてのメディア

人々が他人をブラックボックスとして経験しつつ社会生活を送るということは、人々は社会そのものの全体、あるいは現実そのものを見通すことができないということである。人々は社会とのインタフェースとしての制御メディアによって、社会を観察する。このような社会に生きる人間にとって、現実是客户的に存在するものというよりも、社会システムのオペレーションを通じて構成されたものとして捉えられる。我々は決して

現実そのものを総体として認識することはできない。そして、何かを観察することは、特定の規則に従って観察することであり、その規則によって、その観察において有意でないものは、認識の対象から排除される。人は目の前にあるものからあるものを排除することで、何かを認識できるのである。「認識の可能性はそれゆえ、まさしく現実への接近の不可能性の中にある」とボルツは述べる (ibid.: 17)。我々は一定の規則に従って環境を観察し、意味あるものとそうでないものを認識して情報を選別し、その情報を基に現実を構成する。「情報は決して環境に存在するものでなく、常に、システム内部の加工の結果なのである。このため、最初にあるのは同一性でなく、差異なのだ」(ibid.: 56)。

そして、人々が社会を観察するためのインタフェースとしてもう一つ重要になるのが、我々が一般にイメージするところの、情報伝達媒体としてのメディアである。ボルツによれば、ルーマンの社会学はメディア社会学と捉えることができる。ルーマンの社会学では、「貨幣、権力、法は最も重要な一般化された象徴的コミュニケーション・メディアである。印刷、テレビ、そしてインターネットは、最も重要な技術的な拡充メディアである」(ibid.: 82)。しかし、ルーマンは「コミュニケーションの技術的な基底については完全に無視している」、とボルツは指摘する (ibid.: 82)。それゆえ、一般的な意味でのメディアとの関連で社会を考察する「メディア論」としての側面が、ルーマン社会学との比較においてボルツの思想を特徴づけるものとなろう。この点について検討する前に、次の節でボルツのハーバーマスに対する批判を見ておきたい。このことによって、ボルツの社会に対する基本的な見解がより一層明らかになるからである。

なお、情報伝達媒体といったような一般的な意味での「メディア」については、ルーマンは「拡充メディア (伝播メディア) *Verbreitungsmedien*」と表記しており、ボルツもその用語を使うことがある一方で (Luhmann = 佐藤 1984 = 1993 : 221 = 253, Bolz 2012 a : 82), 「技術メディア」という言葉も用いている (Bolz = 識名・足立 1993 = 1999 : 71 = 72)。ボルツはメディアの技術的性格を強調して議論を展開しているので、本稿では以下、「技術メディア」と表記することにしたい。

3. ボルツによるハーバーマス批判

ドイツ文学・メディア論が専門の川島建太郎は、「メディア論はそもそもその理論的枠組みからしてアンチ・ハーバーマスの立場に行き着くほかはない」と記している (川島 2007 : 67)。これはどういうことであろうか。ボルツがハーバーマスの思想に仮託して批判しているのは、個人を中心とするリベラリズム的な思想である。日本国憲法が13条で「すべて国民は、個人として尊重される」と述べているように、社会を自立し

た個人の集積として捉える見方は社会一般に広く根付いている。それが故に、個人を中心とするリベラリズム的な思想に対する批判は、ボルツのメディア論が一般的な社会の見方に対する根源的な批判を含むものであることを示すものとなる。

筆者の理解ではボルツは特に、①ハーバーマスが反事実的な規範に従って社会批判を繰り返している、②そうした批判を行うにあたり「生活世界」をユートピアとして想定している——という点を批判している。以下、それぞれの点を解説したい。

3-1. ハーバーマスの反事実的規範

ボルツはハーバーマスとルーマンを比較して論じる中で、次のように述べている。「期待が裏切られたとき、人はその期待をあきらめて先に進むか、あるいは、事実に対して期待にしがみつくだである。学習する意欲のあるものは、期待を規範的なものとしてではなく、認知的なものとして捉える。学習能力があることはそれゆえ、規範的な志向とは反対のものである」(Bolz 2012 a: 15)。ボルツによれば、「事実に対して期待にしがみつくだ」のがハーバーマスである。ハーバーマスは「事実に反するものを事実として、潜在的な規範性として理解する」。そして、「規範を前提にして、現実がそこから乖離していることを確認する」。ルーマンはこの反対の立場である。互いに自由である、つまり、互いにブラックボックスであるような人間が、社会生活を安定的に継続させるという「ありそうにないこと」があり得ていることに注目する。そして、「いかにしてそのありそうにないことが可能になっているのか」を問う。ハーバーマスは社会に教を説こうとする。これに対してルーマンは社会に教を説く代わりに、社会から学ぶ姿勢の重要性を強調する、とボルツは主張する (ibid.: 15)。

ボルツは『ゲーテンベルク銀河系の終焉』の第Ⅱ章「脱魔術化」で、ハーバーマス批判に焦点を当てているので、以下、そこでの記述を辿ってゆきたい (Bolz = 識名・足立 1993 = 1999: 59-100 = 59-105)。なお、本稿では同書の翻訳版も参照しているが、この翻訳版では、「Konstruktivismus」という単語に「構造主義」という訳語をあて (ibid.: 38, 40 = 35, 37)、その形容詞である「konstruktivistischen」に「構成主義的」という訳語を充てるなど (ibid.: 113 = 120)、疑問に思える点も散見される (構造主義は Strukturalismus の訳語であるべきで、Konstruktivismus は構成主義や構築主義などと訳すべきであろう)。このため、参照箇所を示すときには読者の便宜も考慮して翻訳版の参照ページを記したものの、本稿では筆者の訳を掲載している。

ボルツは批判理論を、「批判理論Ⅰ」と「批判理論Ⅱ」に区別する。「批判理論Ⅰ」は、アドルノの「啓蒙の自己崩壊」に代表される、近代社会に悲観的な診断を下した考え方である。これに対して「批判理論Ⅱ」はハーバーマスの考え方であり、対話などを通じて近代社会の肯定的可能性を探ろうとするものである。アドルノの議論が理性を懐

疑し、その自己崩壊を示したものであるとすれば、ハーバーマスの議論の核心にあるのは、「理性を懐疑することを懐疑する」ことであるとボルツは指摘する。そしてそのようなハーバーマスの主張は、「日常コミュニケーションという転倒した神学」に基づいていると指摘する (ibid. : 60=61)。つまり、ハーバーマスの議論は神学的で、社会科学の議論とは言えないと断罪するのである。

ボルツによればハーバーマスの議論は次のようなものだ。ハーバーマスの基本的なテーマは、前近代社会で宗教が担っていた社会を統合する力を、「理性」によって置き換えるというものである。そして、近代の哲学的言説が宗教にとってかわることができるためには、融和や統一、超越といった、宗教が提供していた意味論的な内容を、討議に移し替えることができなければならない。聖なるものの権威は、合意 (コンセンサス) の権威に取って代わられる。ハーバーマスのコミュニケーション理論は「脱魔術化された宗教」なのである (ibid. : 61-62=61-62)。

アドルノは、啓蒙が自己崩壊に至るべきものとして近代を描いたが、ハーバーマスにとって近代とは「未完のプロジェクト」であり、修正を重ねながら、その実現を目指すべきものである (ibid. : 65=65)。ハーバーマスは次のような信条を掲げる。「近代とは誤り得るものであるが、不可逆の啓蒙の過程であり、その啓蒙の過程は歴史の中で理性を具体的なものとする一方で、集合的な教育・学習の過程を支配するものである。コミュニケーションの構造が現実的なものを理性的なものとするのである。」 (ibid. : 65=65-66)。しかし、ボルツにとっては、これは「夢想的な仮説」に過ぎない。そして、「夢想的な仮説」は、「コミュニケーションは合意とその合理性を仮定していると仮定する」ことで成立するという (ibid. : 65=66)。

理性とは歴史的に構築されたものであり、その核心においては「手続きの合理性」を意味する。手続き的合理性は集団的意思形成や合意形成の日常の手続きから読み取られるはずのものである。手続きとは討議のことであり、ハーバーマスは討議からロゴス (神の摂理) を推論する。コミュニケーションの実践形式は理性が堆積したものである。そうした理性に対応するのが了解、強制されない意見の一致、合意である (ibid. : 65-66=66)。

実際の討議においては、権力や欲望との関係は無視できない。しかし、そのような主張についてはハーバーマスは暴力のない言語領域と歪められたコミュニケーションという二分法を持ち出して、理性的な討議の在り方を守ろうとする。つまり、アドルノが指摘したような、啓蒙の自己崩壊という近代の不可避の現象のようにみられるものが存在するとしても、それらはコミュニケーションの病的症状として割り引かれ、克服できるものと捉えられる。理想的な状況においては、討議における権力とは、「よりよい議論への強制なき強制」である。討議の形式が理性の統一を保証する。これがハーバーマ

スのコミュニケーション行為の神話の核心にあるものだ (ibid. : 66=66-67)。

このようなハーバーマスのコミュニケーション行為の理論をボルツは「思想的抒情詩」という言葉で表現する。ハーバーマスのコミュニケーション行為の理論は、意思にかかわる問題を認知的なものへと移し替え、誰が決定するのかという問題、つまりは権力の問題を覆い隠してしまうのだとボルツは指摘する (ibid. : 66-67=67)。

ボルツがハーバーマスの思想を評すときに使う「転倒した神学」「脱魔術化された宗教」「思想的抒情詩」などの表現から、ボルツのハーバーマスの思想に対する否定的な態度を伺うことができるだろう。

3-2. 生活世界というユートピア

討議や対話の「理想的発話状況」は、「権力や欲望から浄化された語り」を必要とする。その「浄化された語り」が、よりよき議論による柔らかな強制に基づく了解や合意、連帯による真理の探究が行われる現場となる (ibid. : 69=70)。

ハーバーマスのコミュニケーション行為の理論では、近代に関する哲学的主要概念が、「主観から間主観性へ」「反省からコミュニケーションへ」「超越的統合から生活世界へ」と、体系的に入れ替えられる。特に、生活世界は、ハーバーマスが夢見るユートピアの場と化す。このユートピアにおいて、言語は目的論的に合意を指向すべきものとして捉えられる。しかし現実の言語に関わる行為が誤解に満ち、あるいは、相互理解に至らない状況が存在することに鑑みれば、ハーバーマスのコミュニケーション行為の神話は、「偽りの原則」に基づいているとボルツは指摘する (ibid. : 70-71=70-71)。

生活世界は理性の絆に貫かれたほころびのない世界であり、これに対して、権力や貨幣といった「制御メディア」は人間を自己疎外に追い込み、生活世界からその無垢さを奪う (ibid. : 72-73=73-74)。ハーバーマスにとって、権力や貨幣などの制御メディアによる技術化を通じて生活世界の価値が失われる過程が近代化である。制御メディアは、言語の機能に立ち返ることなく人々の行為を調整する。現代の世界は、生活世界なく機能し、言語なくコミュニケーションを行い、合意なく調整されているように見える (ibid. : 74=75)。近代のあらゆる悪い部分は、制御メディアが生活世界を浸食したことに帰せられる (ibid. : 76=77)。

このような制御メディアに対して、「技術メディア」としてのマスメディアについてのハーバーマスの態度は両義的である。マス・コミュニケーションの過程は一方では、ヒエラルキー化され、権威主義的で中央集権的で一方向的なものとしてとらえる。しかしその一方で、マス・コミュニケーションは市民的公共性を技術的に強化するものであり、普遍的なコミュニケーションを可能にするような合意形成の過程としても捉えられる。つまりハーバーマスは2つの形式のマス・コミュニケーションを区別するのであ

る。ひとつは、啓蒙から発して公開性によって導かれた理性的対話を指向するような、公衆の理性的判断を「純粹に仲介し、強化する」ものである。もうひとつは、市民の理性的判断を操作して「つくり出す」ような技術的マスメディアによるものである。コミュニケーションの商業化がマスメディアの原罪であり、制御と操作が批判と合意に取って代わったのが後者である (ibid. : 77-78 = 79-80)。

ボルツによれば、上記のような見解に立つハーバーマスは、理性的公共性という考えに取りつかれているが故に、制御メディアと技術メディアの双方の現実を捉えることができない。それゆえ「メディアが批判理論の盲点となっている」とボルツは結論づけるのである。ボルツが「制御メディア」についてどう捉えているかは既に述べた。そこで次に、ボルツの「技術メディア」へのアプローチを見てみよう。

4. ボルツによるメディア論

ボルツが理性的な個人間の「合意」といったイメージで社会を捉えることに、根本的に異議を唱えていることについては十分に理解できたであろう。そうした議論の背後には、「制御メディア」の重視がある。しかし、ボルツは同時に「技術メディア」の役割も重視して、「メディア論」を展開している。

先述の通りボルツは、ルーマンの社会システム論にメディアの技術的基底についての考察が欠けていると指摘する (Bolz 2012 a : 55, 63, 82)。ルーマンは『マスメディアの現実』という著書において「マスメディア」一般についての分析を試みているが、確かに、個別のメディアの技術的な側面について論じているわけではない (Luhmann = 林 1995 = 2005)。これは、インターネットが普及して間もない 1998 年にルーマンが死去したこととも関係があるかもしれない。

ボルツはエッセイの形式で様々なメディアを論じており、その全体像を示すのは難しい。本稿では、筆者が重要な論点と考える、①近代的個人と活版印刷の関係、②現実とメディア表象の二分法の解体、③科学技術とポスト人間主義、④デジタル化時代の人間関係の変容——という 4 つの観点からボルツのメディア論を紹介してみたい。

4-1. 近代的個人と活版印刷

ボルツは技術メディアの発展の歴史を大雑把に、口頭から文字、そしてデジタルへの変容と記している。近代の市民社会は長期間に渡り情報を蓄積する技術が必要としたため、口頭から文字中心の文化への変容が起こった。ゲーテンベルクの活版印刷技術によって、世界は「書物」として構築されることになった。19 世紀の写真、レコード (グラモフォン)、映画という書物以外のメディアは、書物、あるいは、言語の絶対主義か

ら感覚的確実性を保護するものであり、テレビ、ラジオ、電話は書き言葉中心の世界から、再び話し言葉の世界へと近づくことを可能にするものであった。そして、活版印刷と書物中心の時代、すなわち、「ゲーテンベルクの銀河系」は、デジタル化の時代を迎えて終わりを告げることになる。そこではコンピュータが、活版印刷の発明に比するようなメディア技術的転換を意味することになる（Bolz 2007: 13-14）。

このように、活版印刷の時代からデジタル時代へとメディア史の転換をイメージするボルツであるが、活版印刷と近代社会との関係についてどのように見ているのかを確認しておこう。

ボルツによれば、文字の発明は空間を隔てたコミュニケーションを可能にし、そのことが官僚組織の誕生や権力ネットワークの構築に結びついていった。特に書物は、文化的な世界認識の特権化された場となって人間の身体を抑圧した。言語を印刷する技術は、近代のデカルトの合理主義だけでなく、フロイト的無意識をも形式化したものである。活版印刷技術は抑圧による秩序の近代的体现であり、そのことが、近代的自己のカギとなるメディアとしての資格を活版印刷技術に与えた。活版印刷技術は歴史を記すのに役立ったのみならず、歴史の在り方に影響を与え、世界を類型化するのに貢献した。人間の活版印刷技術的な拡張は、著者としての自己表現を可能にした。これによって近代的な意味で自己が私的なものとなり、近代的な反省的自己意識が生まれた。活版印刷技術は抽象的な計算の場として近代を開いた。分節化、断片化、分析性、画一性、連続性、直線性、再現可能性、中央集権性といった活版印刷技術の原理は、ゲーテンベルク銀河系の理性のモデルとなった。その主体は受動的で静かな読者である（Bolz = 識名・足立 1993 = 1999: 183-194 = 197-210）。

このように、ボルツは近代的な個人の確立が、活版印刷技術というメディアの普及と直接的な関連があったことを示唆するのである。

電子的なメディアが重要性を増すに従って、活版印刷的人間は終焉を迎える。そこでは活版印刷物は特権的地位を失い、多様なメディアが相互に結び付く「メディア結合体」の一部に過ぎなくなる。このことは、インターネットが普及することによって明確になる。こうしたデジタル時代における技術メディアについての議論を、次に見て行こう。

4-2. 現実とメディア表象の二分法の解体

我々は言語や技術メディアというインタフェースを通して世界を観察している。このことが示唆するのは、人は現実そのものを観察しているわけではないということだ。我々は、制御メディアであれ技術メディアであれ、メディアを観察しているのであって、現実そのものを観察しているのではない。こうした人間の状況を説明するにあた

り、ボルツは「計器飛行」という言葉を使う。

ボルツはこの「計器飛行」という言葉をルーマンの著書から借りてきている。ルーマンがこの言葉を使ったのは、自身の抽象的な理論装置を使った社会記述を説明するため、次のように述べている。「こうした理論の構想を立てると、なみはずれた抽象の状態での描写が強えられる。雲の上で飛行をおこなわねばならぬし、かなりの厚い雲の層を考慮しなければならない。飛行機自体の計器を頼りにせざるをえない。」(Luhmann=佐藤 1984 (2015) = 1993 : 12-13 = xvi)。これに対してボルツは、メディアを通してしか現実接近できない状況を指して、「計器飛行」という言葉を使っているようだ。社会の全体像を見渡すことができない個人は、飛行機が外の風景に頼らず、飛行機に備え付けられた計器のみを見て飛行するようなものである。この計器にあたるのがメディアだということである (Bolz 2012 a : 103)。

この「計器飛行」の喩によってボルツが示唆するのは、現実とメディア表象という二分法の解体である。我々にとって認識可能な現実が存在しており、その現実を技術メディアが表象すると考えるならば、テレビや新聞などの技術メディアが現実を正しく表象しているのか、技術メディアによる情報操作が働いていないのか、などが問題になる。しかし、我々にとってメディアを通さずに認識できる現実などは存在しないと考えれば、現実とメディア表象という二分法は成り立たない。我々はいずれにせよ、メディアによって現実接近するほかないからである。

メディアを「人間の拡張」として捉えたのはマーシャル・マクルーハンだが、人間の感覚器官の延長としての技術メディアは、人間の感覚器官の選択制を決定的に強化する。それゆえ、メディア革命は「感覚変容」をもたらすとボルツは指摘する (Bolz 2012 b : 108)。

技術メディアは人間のコミュニケーションによって成り立つ身体的生活を技術化する。内容面では、マスメディアはステレオタイプや特定のものの見方を通じて、我々の世界経験を規定した。しかしそれ以上に重要なのは、メディア技術がコード化とシンボル化の技術であるということだという。情報を選択するためのコード(規則)を通じて、技術メディアは情報を選択し、そのことによって現実が構成されていく。技術メディアという機器が現実介入してくるのである。高度な技術はメディアの存在そのものを忘れさせ、我々が現実を直接観察しているとの印象をもたらす。今日のデジタルメディアは、技術的世界による「偽装」として「真実性」が存在することを暗示するのだとボルツは考えるのである (ibid. : 108-111)。

映画やテレビは様々なものを再現する技術を通じて、全ての人に平等な世界認識へのアクセスを与えた。その先には、多くの人が経験できないものを経験可能にするシミュレーションの段階が来るとボルツは述べる。ヴァーチャル・リアリティは現代の現実概

念、すなわち、シミュレーションとしての世界という現実概念の明瞭なる帰結である。仮想現実とコンピュータ・シミュレーションは集会的芸術作品としての現実を我々に提供する。人々は技術メディアというインタフェースを通じて現実を経験する。デジタルの世界のインタフェース・デザインは、ユーザーにインタフェースの存在を感じさせないことだ。「没入」がデジタル世界のキーワードになる (ibid.: 111)。

このように、ボルツは現実とメディア表象という二分法の解体をデジタルメディアの中に見るのである。

4-3. 科学技術とポスト人間主義

我々が世界を技術メディアを通じて観察し、その技術メディアは技術的に構成された装置や機器によって成り立っている。つまり、人間の世界は本来的に、人間でないものによってつくられているとボルツは考えているようだ。このような観点に立つと、「ポスト人間主義」という観点から人間や社会を捉えるアプローチに近づいていく (Bolz = 村上 1997 = 1998 : 89-114 = 97-132)。

ボルツはこのことを、マルティン・ハイデガーの「ゲシュテル」という概念に言及しつつ論じている。ゲシュテルとは「足場」という意味のドイツ語であるが、ボルツはこれを、「人間の意識から引き離された世界の意味構造」と説明している (Bolz 2012 b : 9)。自我を持った人間同士の意識の絡み合いの中で社会的な意味が生じ、それによって人々は現実を認識するという側面があるとしても、技術的に構成されたものはそうした人間の意識から独立して存在しており、実際にはそうした技術的に構成されたものが我々の世界を根本的に特徴づけている。今日では特に、技術メディア同士がコミュニケーションして人間にとっての現実をつくりあげている。技術が我々の世界を根本的に特徴づけているのである。そしてボルツは、そのような技術の問題は哲学にとって、長い間盲点であったと指摘するのである (ibid.: 9-10)。

我々は世界を観察するにあたり、ますます技術メディアに頼らざるを得なくなっている。情報の洪水の中で溺れないために、選択、フィルタリング、評価といった技術が必要になる。そして、グーグルの検索エンジンに見られるように、技術メディアは「アルゴリズム」に従って情報を選択し、人々に提示する。人工知能も同様に考えることができる。近代社会があまりにも複雑になり、人間の判断力ではもはやその複雑性に対処できないとしたら、アルゴリズムが人間の判断力に置き換わるのが問題になる。グーグルは純粋な検索技術として知能をモデル化し、検索機械の人工知能はユーザーの人気を解析するアルゴリズムによって成り立つ (ibid.: 112-113)。

ボルツはさらに、アルゴリズムに加えて、ユーザーの参加の役割を指摘する。ユーザーはリンクを貼ったり、タグ付けしたり、ブックマークをしたり、あるいは、プレイリ

ストを作成する。哲学的にこれを述べるならば、ネットはその性質において主観的でも客観的でもなく、間主観的なのであるとボルツは述べる。知能はプログラムによってではなく、コミュニケーションによって成立する。人工知能でなくネットワークの論理というパラダイム転換が明らかになる。知識と生活の全領域において、インターネットは素人の自己組織化を可能にし、専門家の知識と競うような新たな考えを生じさせる。ウィキペディアがこのよい例であるという (ibid. : 113)。

サイバースペースでは、コミュニケーション、参加、交流が重要になる。マクルーハンは「メディアはメッセージである」と言ったが、今日では「ネットワークはメッセージである」と言えるとボルツは述べる。ネット市民は情報を流通させるためのメディアだけでなく関係を構築するためのメディアに関心をよせる。ネットワークは新しい社会的富を生産する場となる。そこで得られる付加価値は「リンク価値」であり、その価値はソーシャルメディアを特徴づけるシェアや贈与、つながりといった行動の中でつくられる。新しいメディアの新しさは、その内容がユーザー自身によってつくられるということにある。ユーザーは開発者になり、メディアは常に、利用の過程で新しく定義される。需要の代わりに参加が台頭する (ibid. : 114)。

このように、デジタル化が進んだ社会では、技術メディアと社会や個人の関わりは、活版印刷の時代とは根本的に変化することになる。アルゴリズムが重要な役割を果たすと同時に、人は積極的に技術メディアの世界に入り込み、それがまたアルゴリズムによって管理されるのである。

4-4. デジタル化時代の人間関係

デジタル化の過程においては人間関係も大きく変わることを、ボルツは次のように説明する。

ボルツは社会学者フェルディナンド・テンニースのゲマインシャフトとゲゼルシャフトという区分に言及しつつ、「強いつながり」と「弱いつながり」という対立軸によって、デジタル化時代の人間関係を記述する。友人同士は強いつながりで、知り合いとの関係は弱いつながりだ。そして、デジタル化時代のパラドクスは、弱いつながりは強いつながりよりも有効である、ということである。親密性が増すほど、情報価値は少なくなる。友人関係は「強いつながり」だが、「弱いつながり」である知り合いからの方が多くの情報を得ることができる。自分と付き合いの少ない人は、自分がアクセスできないような人とのつながりを持っているからだ (ibid. : 115-116)。

弱いつながりの世界は、現代の若者のライフスタイルに適合するものだ。クリック一つで、人は友達になれる。インターネットの中で、社交的であるともないとも言い難い自由な社会が形成されつつある。そうした社会を特徴づけるのは、ネットワーク化され

た個人主義とプライベート化された社交関係であるという (ibid. : 116)。

ソーシャルメディアは友情と社会の概念を根本的に変化させる。友情の条件は今日ではリンクであり、社会とはサイバースペースのことである。古い社会では、友人関係を世話することは極めて時間がかかるものであった。だから、かつては数人の友人しかつくることができなかった。今日では、多くのネットユーザーが仮想空間の世界に数百人の友人がいることを誇っている。数百人の友人との関係は、伝統的な友人関係に比べれば、はるかに弱いつながりであろう。しかし、弱いつながりは情報において強いのである。弱いつながりの強さとは、知り合いは友人よりもより多くの重要な情報を提供してくれるということにある。人はより多くのリンクを持つほど、そのつながりは弱くなる。非常に多くの人々と知り合いである一握りの人々が、我々を世界と結び付けている。そのようにネットワークが機能しているならば、大きな社会資本がそこには存在しているに違いないと考えられる。強いつながりは排他的である。強いつながりは個人のアイデンティティや、グループの連帯感を強める。ここでは盲目的信頼が支配している。これに対して弱いつながりは遠くの知り合いを結び付け、大きなネットワークの自由を開く。情報の拡散は強いつながりではなく、弱いつながりによって高められる。弱いつながりは新しい情報へのアクセスを可能にし、異なる集団を結び付ける (ibid. : 116-118)。

仮想空間のゲマインシャフトとソーシャルネットワークはゲマインシャフトとゲゼルシャフトのよい側面を結び付ける。人はゲマインシャフトに生まれるのではなく、自由にそれを選択し、活動する。村社会では人々は互いを見知っていたが、ソーシャルネットワークでは匿名のままにいられる。仮想空間のゲマインシャフトは地域的に制限されず、関心や能力、好みに従って世界的に組織される。重要なのは、関心事の同一性である。我々が新たに直面しているのは、電子的ネットワークによって担われた隣人関係である。そこには、新しい政治的つながり(リンク)の可能性が潜んでいる。指導的思想、関心を同じくする人々のコミュニケーションのプラットフォーム、帰属への欲求といったものさえあれば、そのほかに必要とするものはない。それゆえ、つながり(リンク)は、社会変容のメディアとなるのであるという (ibid. : 118)。

ボルツはこのように述べて、科学技術の進展によってもたらされたメディアの変容が、人間関係や社会の在り方そのものを大きく変えていくことを主張するのである。

5. 結 語

本稿では、ドイツの哲学者のボルツのメディア論を検討してきた。ボルツによれば、互いに分かり合えないブラックボックス同士の人間は、「制御メディア」を獲得するこ

とでコミュニケーションに関わる負荷を軽減し、社会システムを発展させてきた。人々は盲目的に制御メディアに従い、コミュニケーションを反復させることで社会システムを構築してきた。これに対して、人間同士の理性的な「合意」に基づく社会を規範的に志向するハーバーマスの議論は、制御メディアが生活世界に介入することにユートピアの崩壊を見る。しかし、こうしたハーバーマスの議論は「神学」的なものでしかない。また、ボルツは、人間が「制御メディア」であれ「技術メディア」であれ、メディアというインタフェースを通してしか現実に接近できないことを強調する。特に「技術メディア」との関連では、活版印刷の時代からデジタル化へと根本的に時代を規定するメディアが変化したことを指摘し、我々がアルゴリズムに制御された技術メディアへの依存を強めるとともに、人々の参加を促すデジタルメディアが人々の社会関係に与えるインパクトを強調する。

ボルツは技術メディアについては、エッセイ風に多様な観点から論じているため、本稿ではその一端を紹介するにとどまった。ボルツは自身のメディア論の基礎的な考えをまとめた入門書的な著作も著している (Bolz 2007)。同書については本稿でも言及したが、別稿でそれをより詳細に検討したいと考えている。

また本稿では、ルーマンとハーバーマス以外の研究者との関連についても触れることができなかった。ボルツがデジタル・メディアの、「偽装」としての「真実性」について論じる個所などは、フランスの思想家ジャン・ボードリヤールの影響が顕著に見られる (Baudrillard = 竹原 1981 = 1984)。この点は、筆者が別稿で検討してきたメディア文化を分析するための理論枠組みとの関係で興味深い論点である。先述の水原は、ボルツの議論を通じてボードリヤールの後期の思想を読み解くというアプローチをとったが (水原 2015)、ボードリヤールやボルツの議論を通じて、現代のメディア文化を理解するための新しい理論の構築という観点からも検討が必要であろう。また、技術メディアが感覚変容をもたらすことを指摘した個所は、特にデジタル化時代の「身体性」とメディア文化などに関連するトピックへと議論を接続していくことができると考えている。これらの検討は今後の課題としたい。

参考文献

- Baudrillard, Jean (1981) *Simulacres et Simulation*, Editions Galilée (= 竹原あき子訳, 1984, 『シミュラクルとシミュレーション』法政大学出版局。)
- Bolz, Norbert (1989) *Auszug aus der Entzauberten Welt: Philosophischer Extremismus zwischen den Weltkriegen*, Wilhelm Fink Verlag (= 山本尤・大貫敦子訳, 1997, 『批判理論の系譜学：両大戦間の哲学的過激主義』法政大学出版局。)
- (1991) *Eine Kurze Geschichte des Scheins*, Wilhelm Fink Verlag (= 山本尤訳, 1999, 『仮象小史：古代からコンピューター時代まで』法政大学出版局。)
- (1992) *Die Welt als Chaos und als Simulation*, Wilhelm Fink Verlag (= 山本尤訳, 2000, 『カオス

- とシミュレーション』法政大学出版局。)
- (1993) *Am Ende der Gutenberg-Galaxis: Die Neuen Kommunikationsverhältnisse*, Wilhelm Fink Verlag (＝識名章喜・足立典子, 1999, 『グーテンベルク銀河系の終焉: 新しいコミュニケーションのすがた』法政大学出版局。)
- (1997 [2012]) *Die Sinngesellschaft (Neuaufgabe)*, Kulturverlag Kadmos (＝村上淳一訳, 1998, 『意味に飢える社会』東京大学出版会。)
- (2001) *Weltkommunikation*, Wilhelm Fink Verlag (＝村上淳一訳, 2002, 『世界コミュニケーション』東京大学出版会。)
- (2007) *Das Abc der Medien*, Wilhelm Fink Verlag.
- (2012 a) *Ratten im Labyrinth: Niklas Luhmann und die Grenzen der Aufklärung*, Wilhelm Fink Verlag.
- (2012 b) *Das Gestell*, Wilhelm Fink Verlag.
- 石光泰夫 (1994) 「ディスクール分析の功罪: 身体論の回復を目指して」『ドイツ文学』93: 1-11。
- 伊藤高史 (2018) 「社会学的ジャーナリズム研究の再検討: ニクラス・ローマンの社会システム論からの考察」『法学研究』91(6): 29-52。
- (2019) 「インターネット・SNS時代の「マス・コミュニケーションの全面化」に関する考察: メディア社会学と社会システム論の観点から」『評論・社会科学』131: 1-21。
- (2020 a) 「『啓蒙の弁償法』の文化産業論と社会システム論に基づくメディア文化の分析枠組みに関する考察」『評論・社会科学』134: 1-20。
- (2020 b) 「ボードリヤールの消費社会の「理論」と社会システム論に基づくメディア文化の分析枠組みに関する考察」『評論・社会科学』135: 55-71。
- 川島建太郎 (2007) 「パウロからパンクまで: マンフレート・シュナイダーのメディア理論とディスクール理論」『メディア論: 現代ドイツにおける知のパラダイム・シフト』お茶の水書房: 41-75。
- Luhmann, Niklas (1984 [2015]) *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp (＝佐藤勉監訳, 1993, 『社会システム理論 (上)』恒星社厚生閣。)
- (1995 [2005]) *Die Realitäten der Massenmedien (3. Auflage)*, VS Verlag (＝林香里訳, 2005, 『マスメディアのリアリティ』木鐸社。)
- McLuhan, Marshall (1964 [1994]) *Understanding Media: The Extensions of Man*, The MIT Press (＝後藤和彦・高儀進訳, 1967, 『人間拡張の原理: メディアの理解』竹内書店新社。)
- 宮本真也 (2000) 「書評: Norbert Bolz, “Die Konformisten des Adressseins: Ende der Kritik”」『年報人間科学 (大阪大学)』21: 351-356。
- 水原俊博 (2015) 「後期ボードリヤールのポストモダン情報社会論: N. ボルツのメディア理論との接合を目指して」『信州大学人文科学論集』2: 81-89。
- 上村岳生 (2003) 「意味喪失と討議理論」『京都社会学年報 (京都大学)』11: 1-11。
- 寄川条路編 (2007) 『メディア論: 現代ドイツにおける知のパラダイム・シフト』御茶の水書房。

Examination of Media Theory based
on the Social System Theory by Norbert Bolz :
Searching for the Possibility of Applying His Theory
to the Sociological Analysis of Media Culture

Takashi ITO

This research note is to clarify the major characteristics of Norbert Bolz' theory. Having been significantly influenced by the social system theory of Niklas Luhmann, Bolz developed his own social theory and harshly criticized Jürgen Habermas's social theory based on the idea of communicative rationality. Bolz also developed his own media theory and argued that the digital media revolution transformed our senses of reality. The dichotomy between reality and media representation has radically fallen apart as we cannot determine the differences between the real and virtual. The latest media technology allows an immersion into virtual reality without making us aware of its existence. The computer science algorithm has established foundation in our society as a tool to control human beings. Digital media technology has also changed our image of social capital. Weaker ties in cyberspace have become more effective than the stronger ties in physical space among intimate persons like friends or family as the former is more informative than the latter. These arguments of Norbert Bolz can be effectively applied to the sociological analysis of contemporary media culture.

Key words : Media theory, Media sociology, Social system

